

## バガボンドの作者 井上雄彦

井上は鹿児島県伊佐市で、1967年1月12日に生まれた。現在54歳だ。井上は子供の時から、描くことに興味があり、趣味としてよくマンガを描いた。大学在学中に、少年ジャンプに投稿した作品が編集者の中村泰造の目にとまり、井上は20歳で大学を中退し、上京した。『シティーハンター』で北条司のアシスタントを務めながら投稿を続け、少年ジャンプに投稿した『楓パープル』で漫画家としてデビューした。

次の作品である『スラムダンク』は大成功した。1990年から1996年まで少年ジャンプで連載され、120万部を売り上げた。1998年に、井上は「バガボンド」の連載を始めた。『バガボンド』は2000年に講談社漫画賞を、2002年には『ベルセルク』と共に手塚治虫文化賞を受賞した。

2015年から現在まで、『バガボンド』は休載している。代わりに井上は『リアル』を連載したり、他のマンガ以外のプロジェクトに参加している。例えば、「井上雄彦 最後のマンガ展」という美術館ギャラリーを開催した。井上雄彦は大人気なマンガ作者だ。90年代に「スラムダンク」は日本人がバスケットボールをするのを影響した。読者は彼の作品から多くの大事な人生の教訓に影響している。に影響した。現在でも、多くの人が一番なマンガ作者の一人として考えている。

## 作品のあらすじ「バガボンド」

「バガボンド」は時代劇であり、舞台は戦国時代だ。この物語は主人公の浪人武蔵（たけぞう）の人生についてである。武蔵は子供の時に父が死に、一人で山の中で暮らしていた。武蔵は乱暴な山賊とも戦う野生児だ。第一章の初めで、17歳の武蔵と武蔵の友達の又八と一緒に家を飛び出し、豊臣軍に参加し、関ヶ原の戦場で徳川軍と戦う。しかし、豊臣軍は負け、二人は残党狩りから逃げなければいけなかった。逃げる途中で武蔵は又八と別れ、武蔵だけが故郷の宮本村に帰った。そこで村人は武蔵を捕まえた。臨済宗の僧侶沢庵宗彭が武蔵に見据え「殺すのみの修羅のごとき人生が本望か。違うよ。お前はそんな風にはできていない。乱暴から自由になれ」と教え、武蔵を逃がす。武蔵は逃げる前に、沢庵から新しい名前宮本武蔵（むさし）をもらう。ここから、宮本武蔵が強くなる道を歩いていく。武蔵の剣術が上達するにつれて、たくさんの興味深い人物に出会う。武蔵は戦う理由と自分のことが分かるようになった。物語の途中で、武蔵のライバル佐々木小次郎が物語に登場している。小次郎は聾啞者の天才剣士だが、無邪気で好奇心いっぱいの子供みたいな人だ。小次郎の剣の腕前は出会う侍や剣の達人たちを驚かせた。だが、小次郎は目的を持っておらず、当てもなく歩き回る。この武蔵と小次郎の並列する旅は二つのテーマを物語に与える。武蔵の旅は体だけでなく心

も強くなりたいという道だ。小次郎の旅は、目的はないが、楽しむために強いライバルを探したいという道だ。小次郎は人間の能力の極限を体現した剣術の天才だ。武蔵が人間の条件として命の旅で現実と世界も自分もわかるようになる道を表していた。最終的には、「バガボンド」は、自分と自分の限界を理解するための物語だ。

### 「バガボンド」の引用と説明/分析

宮本武蔵は旅の途上で様々な強い侍に出会う。旅の早い段階で武蔵は宝蔵院流を訪ねて、二代目宝蔵院 胤舜（ほうぞういん いんしゅん）に出会い、勝負をした。これまで、武蔵は生きるために戦わなければいけなかったもので、暴力的な剣を使って来た。武蔵と胤舜の勝負と時を同じくして、ほかの場所では柳生新陰流の創始者、柳生石舟斎（やぎゅうせきしゅうさい）が武蔵の幼馴染おつうと話している。石舟斎は昔、上泉伊勢守秀綱（かみいずみいせのかみひでつな）に出会ったときのことを思い出す。石舟斎は秀剛が穏やかな侍だと思った。練習試合をして、秀剛は50歳の高齢であったにもかかわらず石舟斎は負けた。勝負が終わった時、石舟斎は負けたことが信じられなかった。石舟斎は秀剛にもう一度勝負を挑むが石舟斎は再び負けた。後で秀剛が「剣とは？」と言ったが、石舟斎は質問の意図が分からなかった。石舟斎の剣には我しかなかった。強い相手に勝つことしかなかった、たくさんの人に自分を認めさせたかった。秀

剛は「我々が命と見立てた剣は、そんな小さなものかね。我が剣は天地のひとつ。故に剣は無くともよいのです。」と言う。その哲学は武蔵の哲学に反していたが、胤舜との勝負の間に武蔵は自分の剣には生きるのためのこと以上の意味があることに気づく。このシーンは武蔵の悟りへの一歩として大変重要である。

物語の後半では武蔵は捕まり牢屋にいる。足も折れている。武蔵は70人の吉岡侍を殺したところだ。武蔵と武蔵の師である沢庵宗彭と一緒に命の意味を話している。武蔵は自分の殺した人を考えて、「勝った者はいない」と思う。たしかに剣の道だけしかないと考えた。でも沢庵は剣で人を殺す人間が理解できないと言う。仏教の僧侶として、人間の苦しみや醜さを見てきたからだ。いつも命の質問についての答えを探したが、何も見つけられなかった。でも、沢庵は声が聞こえるようになったと言う。武蔵が「誰の」と聞くと、沢庵は空に指さした。「それによるとわしのお前の生きる道は、これまでもこれから先も、天によって完璧に決まっていてそれが故に、完全に自由だ。」と言う。沢庵は「人間」についての答えはないが、天や自然とつながり生きるなら、人間は自由になれると説明する。武蔵が殺人者であっても、天や自然とつながっている。自分の人生をやり直せる。このシーンから、武蔵は沢庵の助言をわかるようになった。

物語の後ほど、武蔵は雨が多すぎて食べ物が育てられない村に住んでいる。洪水の被害で食べ物を育てられないので、武蔵は水を制御できないか試してみた。「水に勝つ」のだと言った。それと同時に、剣の道について考えていた。どうしても一番強い人になりたい。水に勝てないなら、自分の力に意味はあるのか。故に、武蔵は水を支配するために、いろいろな方法を試すが、すべて失敗する。だがそこで武蔵は沢庵の言葉を思い出す。天や自然もすべてつながっている。川に行き、水を手に取り、水を分析した。「地形によって、外からの力によって、水のありようは完全に決められ、水自身ただそれに従っている、どこまでも水、完全に自由」との考えに至る。これのとき、武蔵は沢庵の同じ悟り？の境地に達する。自然とつながる存在を理解することが武蔵の悟りだ。それに、「なんかに勝つ」という願いには意味がない。代わりに武蔵は自分の限界を超えたものと戦わないのが正しい答えだと悟った。ここで武蔵の剣は天地の一つになり始めた。